

「知る」という経験

南林間中学校 三年四組

小泉 莉々夏

私が産まれる前に亡くなった祖父は視覚障
がい者だった。そう母から言われた時、私は
何も言葉が出なかった。驚き、戸惑いとは違
う感覚だった。まさか自分の身近な人に障が
いをもつ方がいるだなんて思いもしなかった
からだと思う。思わず私は母に、「どんな人
だったの。」と聞いた。

祖父は産まれつき目が見えない先天性の全
盲を患っていた。そのため眼球は白く濁って
いて、町を歩く度周りからは少し不気味がら
れる、子供からは悪気なくあの人、と指をさ
される、怖いと言われる事が多かった。それ
を隠すように普段はサングラスを付けていた
軽く頷きながら聞く私を見て、母は続けて
祖父とのエピソードを話してくれた。
祖父はよく外に出かけるのが好きで、一人
で白杖を持って出かけていた。でもある日は

電車の線路に落ちてしまう、ある日は点字ブ
ロックの上に物が乗っていて歩けなくなつて
しまう、白杖が人にぶつかってしまったその人
に怒られるということが多くあったのだ。
私は可哀想、そう思った。なぜ障がいを抱
えた人が常識のない健全者によつて、不幸な
目に遭わなければならぬのだろうか。
その考えが私の偽善だと気づいたのは、
「でもね、お父さん凄かったんだよ。」そう
言つて話してくれたエピソードを聞いてから
のことだった。
祖父は一人出かける、といつても散歩程の
ことだけではなく、一人で海外旅行に行った
り、一人で鍼灸院を予約から施術まで行って
いたのだ。また、自分には優しい人で、学校
行事には必ず足を運んでくれて、親子で行く
遠足の際には一緒に来てくれて、皆んなの前
で祖父の弾くアコーディオンと共に歌ったり
踊つたのは一番の思い出だ。だつて祖父は普
通の人なんだから、と。

それを聞いた瞬間いかに私の考えが表面しか見ていない薄っぺらい考えなのだ気づいたのだ。何が健常者だ、障がい者だ、皆んな同じ人間であり可哀想なんかではないのだ。可哀想だと思うのは思いやりなんかではなく偽善にすぎないのだ。母が見せてくれた祖父の写真はとても笑顔だった。みんなと同じ笑顔だったのだ。

私が考えるべき思いやりは可哀想、助けあげたい、非常識な人を減らす事ではなくそういう障がい者と健常者というくくり、思いやりの考えを変える事なのではないかと思う。なんとなく聞いていた話が私にとっては考えを変えてくれた、とても良い経験になった。身近に居ないから経験する機会がない、そう思っていた私に「知る」という経験を与えてくれた祖父には感謝しかない。一度は会って見たかったな、そう思う私にとってただ一人の自慢の祖父だ。